



神苑の決意

主張

「竹島の日」に新たな日韓関係を考える―朝鮮神宮御祭神論争を手掛かりに

「神苑の決意」 主筆 木川智

毎年二月二十二日は島根県制定の「竹島の日」である。この記念日は、明治三十八（一九〇五）年二月二十二日、島根県が竹島の所属を告示したことにちなむ。

竹島問題は、こうした竹島編入の経緯やサンフランシスコ条約における日本の竹島の領有権非放棄など、国際法上あるいは歴史上の領有の正当性に本来の核心があるはずだが、問題の背景に日韓の歴史認識の相違が横たわり、複雑化している。

明治三十七年、第一次日韓条約が締結され、財政・外交などの面で韓国は日本の圧力を受けており、そうした中で行われた島根県の竹島編入は、韓国が正當に抗議できる状況でな

本号の内容

【主張】「竹島の日」に新たな日韓関係を考える―朝鮮神宮御祭神論争を手掛かりに（木川智）：1 / 【解説】沖繩米軍基地問題と基地経済（西山徹）：3 / 【連載】アジア放浪記―タイ王国を見て皇国を尊ぶ③（仲村之菊）：5 / 【連載】『倭姫命世記』を読み解く③―伊勢神道と『日本書紀』―（柳凜）：9 / 【寄稿】『神苑の決意』に期すること（櫻隆雪）：11 / 活動報告：13 / 談話室（木村絃希）：15 / 花瑛塾日誌：16 / 編集後記：16

頒価：1部千円
（送料別途160円）

かったことも事実である。こうした日本の韓国併合の動きと一体化したものと竹島問題はとらえられ、歴史認識の問題と連動しており、国際法や歴史的な立場からの解決は困難と思われる。

私たちは先の大戦と韓国併合を再検討し、日韓の歴史認識の問題について学ぶことにより、竹島問題をはじめとして新たな日韓関係を考えていかなければならない。

高木益太郎と山縣有朋の朝鮮神宮御祭神論争

神道信仰・神道精神を掲げる花瑛塾は、韓

国併合を巡る神道家の動向、特に韓国併合後に創建された朝鮮神宮を巡る「朝鮮神宮御祭神論争」における神道家の議論に問題解決のヒントを求めたい。

韓国併合を経た明治四十五年以降、政府は朝鮮半島での神社創建の動きを本格化させ、大正八（一九一九）年に朝鮮神社（後の朝鮮神宮）創建が決定するが、同社奉斎神は何であるべきかという論争が展開される。

具体的には、議会において、朝鮮総督府政務総監・山縣有朋が天照大神・明治天皇奉斎論を展開し、平田派国学の影響を受けた立憲国民党・高木益太郎が日韓同祖論を背景に韓国建国の王・檀君ハ素戔嗚尊の奉斎論を展開